

# 37年ぶりの快挙！

## 令和の期待星が2連覇

5アンダー 139

出利葉 太一郎(筑紫ヶ丘)



昭和に作られた記録が平成を飛び越し、令和で再び脚光を浴びる。日本アマ制覇の尾家清孝(周防灘)が1981年から3年連続優勝して以来、37年ぶり4人目の連覇。「連覇は僕だけにしかチャンスはなかった。幸せです。ほかの各連盟が中止になる中、開催が嬉しかった。関係者の方々に感謝します」と出利葉が喜びを素直に表した。昨年のフェニックスCC(宮崎)は高校3年生、今回は大学1年生での勝利となった。

例年の4日間制から新型コロナの影響で2日間に短縮。結果的には初日68の貯金が

大きかったのだが、日大1年となった今年に成長の跡を見せたのがアプローチとパットの小技の上達だ。最終日はティーショットがぶれ、セカンドも思うようにいかない。1, 2番は2m弱のパーパットを沈め、3番ショートでは第1打を左奥のバンカーに入れてボギー。5番ロングは第1打を右林につかまるが、リカバリーとアプローチでバーディーを奪った。5, 6番では左に曲げながらも、何とかパーで切り抜ける。圧巻は9番ロング。ティーショットは距離は出たものの、左の松の根本。「去年までなら間違いなく木の間を狙ったと思います。今年は(フェアウエイに)出して、落ち着いてピンまでの距離を測りました。残り260ydでした」。このホールもパーで切り抜け、アウトはショットは左右に乱れながらも2バーディー、1ボギーの35で折り返した。



優勝というプレッシャーと闘いながら、スコアを落とさずに、まとめていく。それは何なのか。「練習だと思います。(日大)4年の先輩・清水大成さん(東福岡高出身)たちと一緒にラウンドして色々教えてもらったりもしました。例えばアプローチでも今までだったら、たまたま寄ったという感じですが、今は普通に寄っている。パットにしても、『入るんだ』という気持ちで打っているし、パーで上がれる自信がついています。あきらめないんです」とサラリと言っていた。練習に裏付けされた自信である。

180cm、88kg。体重は昨年より4kg増えた。その分、飛距離もアップ。豪打を見せつけたのが打ち上げのやや右ドッグレッグの7番ミドル(396yd)だった。第2打がピンまで60yd。ということは、330ydは飛んだ計算になる。「きょう一でしたね」と軽い

笑顔で披露した出利葉は、1・5mにつけてバーディーにつなげた。

連覇を達成した8月5日は母・千恵さんの43回目のバースデー。大会が延期されたお陰でいい親孝行となった。来年は尾家以来、史上2人目の3連覇がかかる。そのことをメディアから質問されると、出利葉は力強い言葉を発せず、穏やかな笑みを浮かべた。「まだまだ足りない部分があります。例えばバンカーショットとか」。探求心旺盛な19歳が20歳となる令和3年に、また何かをやりそうな予感が漂う。

## 【惜しかった上位の一言】

◆2位・商崎 涼平(パープレーからスタート。最終日は3連続を含む5バーディー、2ボギーで首位から2打差の3アンダー、141)「ショットが良くて、アイアンも(ピンに)ついていました。バーディーの取りやすい所にいていました。試合では3連続バーディーは2度目。距離はほとんど1mくらい。今年からドロワーをフェードに変えてショットが安定してます。それまではチーピンで苦しんでいました。今年の目標は九州のつくタイトルを取りたいなあ、と思っていましたが、切り替えて、目の前の試合を頑張ろう、と思います」

◆3位・篠原 剛(木に2度当たった2番でダブルボギー。その後3バーディー、1ボギーで盛り返すが、通算2アンダーの142)「(第1打を右に曲げた2番は)セカンドが思ったよりつかまってしまい木に当たった。あのダボは精神的にきつかった。ただ、5番で第1打を林に入れながらも、何とかパーを取れて、気が楽になりました。見に来る人も少なく、緊張はしなかった。首位との差をアウトで詰めておきたかったですね。学生の試合もないし、あとは大分である九州オープンだけ。地元で頑張ります」



大会が開催された熊本空港CC

